

講演要旨集-その2

(文責: 県生協連事務局※講演要旨の一部を事務局で要約したものです。)

講演 2: 岩手の生協の歴史とこれからの役割

講師 岩手県生協連会長理事加藤善正

世の中が大きく変わる中で・・・

世の中が大きく変わって、今までの価値観が成り立たなくなってきています。市場任せにして、金が金をもうけて、個人もばらばら、働く労働者は将来の見通しが無い。来春卒業の高校生の就職率は、内定で4割強。しかも、これは請負や派遣も含めてですから、正規で就職が内定している人はわずか1割ぐらい。残り9割は、まず就職ができるかできないか、就職できたとしても、派遣や請負でいつ首を切られるか・・・。大体が就職できたみなさんの時代とはまったく違う。そういう時代が変わってしまった。だから、私たち生協の社会的役割も、今までの延長線上、あるいは、今まで私たちが感じている協同組合の姿という概念で、本当に役に立つのか考えていかなければいけない時代にきています。

今はなぜ、組合員が組合員をふやせないのか。

昔、生協ができてすぐの頃は、まだ店もないですから、卵だとか洗剤、醤油、味噌などの共同購入。そして、やっと店ができて150坪の小さい店で、品揃えも不十分でコープ商品もあまりない。産直と言っても、そう商品がなかった。しかし、食品添加物を減らすだとか、灯油の共同購入だとか、いろいろな運動をやったわけです。だから、事業は非常にお粗末で魅力的ではなかったが、組合員さんが組合員を増やしてくれたわけです。どうやって増やしたのか。まあ、損か得かという話もしたかもしれませんが、「私たちはこんな活動もやっています。そのためには消費者がもっと力を合わせなければなりません」「もっと安全安心なものを食べるには、分たちで作らないと安心できません。自分たちで作ってまずまずの値段でやるには、もっと多くの人に買ってもらうなくてはできません」「そのためには、仲間が必要で、ぜひ生協に入ってください」という形でお勧めをしたのです。今、組合員が組合員を増やすことがなかなかできない。それはなぜかと言うと、「生協は、自分でいいなという商品を買えばよくて、よくなければ隣にあるスーパーで買えばいい」。組合員にとって、生協は損か得かだけでしか映らなくなってきているのではないか。そういう生協に「ぜひ加入してください。入りましょう」と言うのは、特に生協の歴史も社会的な意味も知らない委員さんには、何で私がそんなことまでしなければならぬのかと。地域の生協に入っていない人たちが生協をどう感じているかという点で言えば、やはり自分にとって損か得かで考えて、私は必要ないから入らない、と言う。すすめる方も、損か得かだけになってしまう。組合員に対する社会的な教育、社会的な運動は、自分でやってみないと体験できないようなことですから、それへの参加が非常に弱い。そういう取り組みがなかなかできなくなっているわけです。

今、生協に問われていること。

現在、こういう時代になっているとすれば、先ほど岡安さんがお話しになったように、地域で、必要によっていろいろな人々がもっともっと手を結ぶ活動を積み上げていかなければならない。人々がばらばらになっている地域のコミュニティにおいて、生協の力が少しは役に立つのだろうか……。そのためには、もう一度、私たちの生協の歴史を学んで、そこに何があったのか、組合員や職員はどういう思いで参加していたのか、それがだんだん変わってきたのはなぜか。そして、これからもう一度、そういう状態をつくることができるのか。時代が変わったからそんなことはできない、というふうに割り切ってしまうのか。ここが今問われていると思うのです。

岩手県の生協運動は、各生協の歴史と成功、失敗の教訓を生かして、

今日まで発展を続けてきました。

特にこの間は、新自由主義・小泉改革という名の市場経済優先による情勢を「くらし・地域・平和・経営」の4つの危機としてとらえ、それに真正面から取り組もう、「地域に根ざし役立ち・地域から信用され・地域からサポートされる生協」の構築を進め、「あくまで協同組合らしい生協の運動と事業」を一体的に進めようと取り組んできました。

岩手の生協のこれから言えば、「地域に根ざし役立つ」という点では、地域では様々な必要によってつくられている協同の営み、ボランティアやNPOなどが今はいろいろあるわけですから、それをもっと調査して一緒に進める、そういう連帯の活動がこれからはますます重要です。一緒に取り組むことによって、改めて生協の側も、協同の組織、相互扶助の組織だと確認できると思います。また、「地域から信用される」、それがなければ何を言っても聞いてもらえないと思います。そして、その結果として「生協がんばれ」と。「岩手は生協があって、こういう地域社会ができていなのだ」と言われてはじめて、激しい競争の中でも、生協の事業・経営もサポートされる。そういう関係をどうしてもつくっていかなければならないのではないかと思います。

人間個人も組織も運動団体も、厳しくなればなるほど、「上向き、内向き、後ろ向き」になります。「上向き」とは、組合員や地域社会で大変な点に目がいけないで、権力や、金や、行政のほうを見る。上からの指示待ちをする傾向です。「内向き」は、周りで何が起きようが関係がない。とにかく自分たちの事業・経営を存続させることに役立つかどうかでものを考えるという傾向です。「後ろ向き」というのは、数字とは結果であり過ぎ去ったものですが、それにこだわって、これからどうするか、組合員のくらしや思いから一体何をなすべきかを考えられないということ。そういう意味では、今こそ「下向き・外向き・前向き」の発想が大事だと思います。

ぜひ、今日の資料の生協の歴史をご覧いただき、みなさんが感じている、加入あるいは就職してからの生協。それだけが協同組合ではないのだということ。また、5年後、10年後…本当に世の中に役立つ、地域社会に貢献できる、そういう協同の輪をつくっていく上で、地域の様々な方々といっしょに、力を貸したり借りたりしながら、輪を広げていくことが求められる時代に入っているのだということを考えてほしいと思います。